



群馬県コンクール 金賞

祖父が教えてくれたこと

伊勢崎市立第四中学校 1年 西村 空

「美味しいご飯が炊けているよ」

小学校の頃、僕がサッカーの試合や練習から帰って祖父母の家に行くと、いつも祖父母がそう言って笑顔で待っていてくれた。白米が大好きな僕の為に、僕が祖父母の家に来ることが分かっている時は、いつもお米をたくさん炊いていてくれるのだ。

僕が待ちきれなくて炊飯器を開けると、温かい湯気が上がりお米のいい香りがした。

僕は白米が大好きだ。大好きな白米に祖父の作ってくれた大きな野菜がゴロゴロ入ったカレーをかけ、祖母の作ってくれた煮物を囲みながら皆でたくさん話をして食べるご飯の時間は最高の幸せだ。どんなに疲れていてもお米を食べると疲れが吹き飛んで元気が湧いてくる。祖父は、お米を作ってくれた方達にいつも感謝の気持ちを持って、ご飯粒を残さず食べることを、食事の前に「いただきます」と言って食べるのは、食べ物への命をいただくという意味だから敬意の気持ちを持って食べるということ、物心ついた頃からいつも僕に教えてくれた。だから僕は小学校一年生の時から給食を一度も残したことがない。それを祖父に言うと、優しい顔で笑ってくれた。

特に僕は、白米で作る塩おにぎりが大好きだ。祖父の作ってくれる塩おにぎりは、大きな手で握るので、大きくてとてもシンプルだけどいい塩加減で、噛めば噛むほどお米の旨みが出てきて甘くて美味しい。僕はおにぎりを食べながら、どうしてお米はこんなに美味しいのか祖父に聞いてみた。すると「お米が出来上がるまでにはたくさんの手間と愛情が込められているからだよ」と教えてくれた。

僕の親戚の家は兼業で米作りをしているので、僕も祖父母と一緒に種まきや田植えを手伝いに行ったことがある。五月には、箱に入れた土にもみの付いたお米を一粒一粒まいていく。重い箱を何百箱もトラックに積み込む作業は力仕事だ。芽が出た後は、苗が出来上がるまで毎日朝晩水をあげ様子を見ていく。苗が出来て田植えをするときは重い苗箱を運び、田んぼでは足がぬかるみにはまり抜けなくなったこともあった。毎日、晴れの日も雨の日も、田んぼの水の管理をしている様子も見てきた。そして秋になり、まだ残暑が厳しい中、汗だくで一日中稲刈りをしたことも覚えている。

お米が出来上がるまでにはたくさんの大変な作業があること、この小さな一粒一粒には大切に育てられたたくさんの愛情が込められていることを僕は身を持って体験させてもらったことを思い出した。毎日当たり前のように美味しいお米を食べることができるのは、大変な工程を経て作ってくれている方々のおかげなのだ。

お米は美味しく栄養満点で、僕にとって元気の源だ。ここまで大きくなったのも毎日食べているお米のおかげだ。お米を作ってくれた方達に感謝の気持ちを持って食べることを絶対に忘れてはいけないと思いつつこれからも大好きなお米をしっかりと噛み締めて食べていこうと思う。

「美味しいご飯をたくさん炊いて待っているね」

祖父から電話がきた。中学生になり最近は部活動が忙しく、祖父母の家になかなか行くことができなくなってしまった。さみしそうな祖父の顔が目には浮かんだ。僕はあの楽しかった団らんを思い出して、時間ができたらすぐにでも会いに行きたいと思った。

そして、祖父の作ってくれた大きな塩おにぎりを早く食べたいと思いつつ、会える日を楽しみにしている。